
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Nコード】

N0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時はニート、またある時は宮殿の主になったりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。小説を書くのが初めてで、書き方・内容が拙いですが、どうぞよろしくお願いします。

潤「仕事したり闘ったりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃：チクショウ、目から汗がとまらねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願いします

では、はじめりはじまりゝ

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。（『ウィスニルの予言』）

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か？

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・エエッ！！

まあ、落ち着きましようや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰って来る↓夕飯を食べる↓勉強、と思わせてラノベ↓1
2時を過ぎたので寝る↓目が覚める↓今

ああ、もしかしなくてもこれ夢じゃ…

「夢じゃないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・エエッ！！（本日2回目）

「な、なんだお前。ってかどこから出てきた！」

さっき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かって俺は言った。

「私？私は転生の女神だよ？」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん！」

んな事言われたって：

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いいよ」

そう言う女神（自称）は何やら小声でしゃべり始めた。
シ、シニールだ：

ボワッ

独り言を終えたらしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう？これで私が可哀想な子じゃないって分かったでしょ」

こんなの見せられたら

「お、おう。本当らしいな」

としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、どうやらあなたは寝ている時に死んじやったらしいの」
ん？

「ちょ、ちょっと待て。え？俺死んだの？」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明！

ってか読めてきたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役と。

はいはいテンプレ乙

「その通り！あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じゃなくて決定事項かよ…ってか心を読むな。

「俺に拒否権は？」

「ない！」

デスよね。

「まあ、そのまま異世界ってのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ」

テンプレキター！

「じゃ、今のまま何も変えずにスタートして」

「良いの？反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか」

「俺のミステリアスを返せー！！」

KY女神ー！！もう流行ってない？さいですか。因みに俺は今リアルorzになっている。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からないけど、ごめんなさい」

「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもって訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね。あなたは反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないところだったんだよ」

だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあったからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちょっと待った」

「何よ」

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！！次の話ですればいいでしょー！！」

次の話って…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの！じゃ、気を取り直して異世界へしゅっ…」

「出発」

・
・
・
・
・
して
やっ
たり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。ってか絶対に俺の容姿とか分からないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目 いただきます

2 人物紹介

○羽山 潤 はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に：ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

○転生の女神 てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのようで：身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な：

バコーンッ！！

しばらくお待ちください

「えー、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なってしまったので、私、転生の女神が代わりに紹介しまーす。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよねー潤君（ニコッ）」

「イ、イエス マム。何者かにであります！」

「よろしい。っと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいまーす」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの！潤君が飛ばされた異世界『ウェドリア』は剣と魔法がメインの世界でーす」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわゝ、やっぱ行きたくねゝ」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさゝ逝ってきなよ」

「危ない世界なだけにシャレになってねゝ！！」

「っと、また話が逸れちゃった。潤君がどうでもいいこと言うから」

「どうでもいいことじゃねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカッタネー」

「誰か助けてゝ！！」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどこかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だねゝ。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよゝ？笑っちゃうよねゝ」

「俺の扱いひでえ！しかもまた逝こうになってるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッツゴー！」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしくお願いしまゝす」

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやっと思世界か。ん？なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋ってたんだ？」

3 なんか、緑のものが…(前書き)

やっと異世界に到着

3 なんか、緑のものが…

「何なのこのテンプレ展開」

転生した瞬間、といっても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかというキツネ色の体毛を纏った狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃないかね？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。目を見る目を、丸いキュートな目とつり上がった獲物を狙う目だよ？どっちがかわいいかなんて分かりきってるじゃないか。同じネコ目イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけど…そう、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ？作者に至っては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！ってか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

ミドリムシが現れた

「何かデカイミドリムシきた〜！ってか変なテロップ流れた〜！」

ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあれがそうなのか分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなのついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あゝあ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張ってね〜」

KY女神はそう言う俺との交信を切った。クソッ、自分だけ作者の怒りから逃れやがった。

「はぁ…しょうがないからやりますか」

そう俺が言くと、今まで律儀に待ってくれていた狼が一斉に向かってきた。ミドリムシはその場で待機のようにで…

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なっ！」

真っ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶をした。急所だからちよつとした力で気絶させられる。続いて狼その2が、俺が1匹倒して油断している所を狙ったのか、後ろから飛びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食わす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやっぱり気絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟ったのか、逃亡した。相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空気となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、緑のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです(前書き)

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、ニョロニョロした鞭毛を持つユーグレナ目ユーグレナ科の生物。ちなみにユーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか」

俺がヤツに向かって走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。

「キモイっつゝの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなった鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎってもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かった。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあった石を拾って鞭毛の届かない位置まで下がった。

「あれが本当にミドリムシだとしたら」

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのうち話すとして…

ゴスツという音がして、核の少し手前で止まる。ってかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやったのに…

シューッ

この音？そりゃあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やっぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合成みたいな植物っぽい事もできるんだよな」

正確には原生生物って言って、動物でも植物でもない。中途半端な奴め。

「せっかく頭使って倒そうと思ったけど、弱点も見いだせないし手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦いが始まりまゝす。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いな。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

そんなでもって拾った石を核に向かって連射

ズドドドドッと凄いい音を出しながら石はヤツの核に向かって飛んでいく。寸分変わらず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の1発として大きめの石をヤツの核に向かって全力で投げつけた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避けて…

ってな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じた。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあゝ、ヤツはとにかくキモかった。ってか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会うぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみにミドリムシ元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシユールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…：こう何もないと方向が合ってるのかすら分かんねーよ。

～1時間後～

「まだかよ～そろそろ木の1本でも見えていい頃だろ～」

～2時間後～

「……………」

～3時間後～

「作者アアアッ！！こりゃ何の嫌がらせだぁ！さっきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじゃねえぞ！？」

～4時間後～

「作者さんよ～。このままだと予告で言ってた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ～？」

ガタン

「ん？何の音だ？って、やっと風景動いた～！うわ～、前に進めるって素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし1人で喋ってても危ない人に

なっっちゃうから、こっからは心の中での眩きで。

森に入ってから空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかったので、今日は野宿することとなった。食事はしょうがないから木に実っていた果実らしきもので済ませた。

・・・そういえば今回って人と会うんじゃないかったっけ？まあ、思ったより進まなかったから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンッ

何かが俺の耳元を過ぎていった。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかった。

人と会うってそういう事…！？

確かに第1異世界人だけでも、確かに盗賊じゃないなんて言うてなかったけれども！

俺がそんな事を思っていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそう、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかなくても、あなたたちって盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さっきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪ってきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさっきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言った瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどっかの木にぶつかって気絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時の間にか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもっ!!」

盗賊1(断定)は顔を真っ赤にして懷から大振りのナイフを取り出した。ちなみに顔を真っ赤にしてるのは恋する乙女的な感じじゃなく、怒り心頭って方の…え?分かってる?さいですか。

顔を真っ赤にするって言えばね、俺が中学2年生の時に…

「死ねや!」

盗賊1(断定)が俺に向かって手に持っているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…昼に出会った狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクッと終わらせますか。

「舐めた真似しやがって」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今まさに俺の命を刈り取るうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。

「そんなもん振り回して危ないですよっ」と

そう言って俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1(断定)に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1(断定)は倒れ始め、俺は盗賊1(断定)の鳩尾目掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1(断定)は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ、終わったな」

そう言って俺は盗賊たちを放っておいて夜の森を後にした。眠気?命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君で〜す☆え〜つと、次回はいよいよ街に入るのか？ ってかろくなもん食ってないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち鬱陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ〜」

6 なんか、いい人みたいです(前書き)

潤はニートにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいです

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やっとの思いでどっかの街の前まで辿り着いた。詳しく説明しろって？ご冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ。

（ここはカラコルね）

KY女神もつい5分位前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだなく、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けてたんだ。んでもってその事をさっき知らされて、なら俺もできんじゃない？ってなって実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃっていうわけ。

（街の名前か？）

こんな感じで。

（（そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ？））

（（へへ。でも俺金持ってるぞ））

盗賊から剥ぎ取ってくるべきだったかな：

（（この街、っていうか殆どの街にはギルドっていう組織があって、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ））

（（なるほど。じゃ、早速行きますか））

一旦交信を切って俺は街の中へと入っていく。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きさも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドかあ。でかい建物だな」

入ってみないことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる。中はとても広かったが、ゴツイ男が沢山いて、どちらかというと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座っていた。テンションだだ下がりだ。

「すいませ〜ん。ギルドに加入したいんすけど〜」
テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね！こちらに身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？身分証明書なんて持ってないぞ〜？

「身分証明書ってないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答えが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまうとギルドの信用に関わりますから」

というものだった。ま、何となく分かってただけど。

「身分証明書忘れちゃったんで出直して来ます」

という無難なことを言ってギルドを出た。

「さて、どうするか〜」

KY女神とはまた繋がらなくなったし…とりあえず仕事探すか〜

・ ・ ・ ・ ・

仕事みつからね〜！！何でここの仕事は専門的なものばかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしいし…ギルドなんて創った奴今すぐ出てこ〜い！

はぁ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんたこんな所で何してんの？邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそうだから今回はここまで。え？ダメ？さいですか。

作者からダメと言われたのでもうちよつと進めるよ。

俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したかのようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやつり目の目も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言っても過言では無い。目測で身長160cm位の少女だった。だが、さっきの言動といい、この容姿といい、

「どこのツンデレですか？」

しまったアアアッ！！思わず口に出してしまった！

「はぁ！？何訳わかんない事言ってるの？」

反応から察するに異世界にはツンデレという言葉は無いらしい。が、機嫌を損ねてしまった。

「ゴメン。君があまりにも可愛かったからつい」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言ってるのよ！」

と言ってきた。うん、ナイスツンデレ。

「ところでさあ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ。1日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。って事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもらうわけにはいかないからなく。じゃ、今夜も野宿かな。

よつこらせ、と俺が立ち上がって街の外へ歩き出そうとすると、

「い、1日くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ」
さっきも言ったがもう一度言おう。

ナ
イ
ス
ツ
ン
デ
レ

6 なんか、いい人みたいです（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じてニートじゃない！ニートっていうのはだな、not in education, employment or trainingの略でだなく・・・（長いので省略）・・・だから俺はニートじゃない！さて、ではやっと次回予告だな。次回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らかに！全ては俺次第ってか。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじゃまします」

そう言っただけ俺はツンデレさん（仮称）の家に連れてもらった。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだった。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ……ってか未使用だろう。

「何突っ立ってんのよ。さっさとそこら辺に座りなさい」
では遠慮なく、とイスに座る俺。ツンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？　そういえば君って1人暮らしだよ？　何でイスが2つも……はっ！　もしかしてこれには今回の話のキーポイントなんじゃ……」

「何1人で暴走してんのよ？　イスが2つあるのは、このテーブルを買ったときに付属品として付いてきたからよ」

バツカじゃないの、と言わんばかりに……

「バツカじゃないの？」

言われました。

「ごめんなさい……それにしても生活感の無い部屋だな」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かってはいるけど何か引っ掛かるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か……ってか一切デレを見せないってどういうこと？　このままじゃせつかくのツンデレがツンツンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかったよな？」

「え？　ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為に。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは……知リたかったら教えるけど……」
？

そう言っただけツンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃないなら教えて。犯罪者だところちが困るし」

この世界って犯罪者が多いのか？ギルドでも言われたし：だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言っても信じてもらえないだろうし。

「羽山 潤って珍しい名前だろ？それは俺が他の世界から来たからなんだ」

って事で正直に言うことにしました。

「何言ってるの！？確かにハマなんて名前は珍しいけど他の世界なんて：ふざるのもいい加減にして！」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもらえなくていい。あと、俺の名前は潤の方。羽山はファミリーネームだよ」

「ふーん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし」言動は怪しいけどって：ホントの事なんだけどな」

「そりゃどうも、じゃ今度は君の名前を教えてよ」

「私？私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの？」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言ってるのね。いいえ、ギルドには入ってないわ。ただの護身用よ」

ふーん。日本じゃ剣なんて持ってたら即銃刀法違反で捕まるから遠い存在だったけど、こっちじゃこんな一般的なのか」

「そういえば、セレンの髪の色って珍しいけど、それって地毛？」

元の世界にこんな髪の色の人がないのはもちろん、こっちの世界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかった。

そう言った瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さっきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かった。

そんな重苦しくなった空気の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアスだぞ。

「何か聞いちゃいけない事だったか…その、すまん」

ここでふざけるのは少し違う気がするので素直に謝しておく。

「いいの。気にしないで」

・
・
・
・
・

気まずくくく！誰か助けて！ってかKY女神仕事入りすぎだろ！
繋がりにく過ぎるわっ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？ってか最初から選択肢のコマンドが下に出てないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ…
「ちょっと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢のコマンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しいって言ったでしょ？」

「あ、ああ」

そっちの話か？

「私の髪のこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの」

「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙って聞いてて！」

こんなシーンでツンデレ発動させなくても。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む」

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてるの。それがこのオレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している《シャイネン教》よ」

ドイツ語で《光る》か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうっ？これであなとも私の事が嫌になったでしょ！？いいのよっ、もう慣れるか…」

「今まで、辛かったんだな」

そう言った俺は、いや、そうとしか言えなかった情けない俺はセレンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえ〜ん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまった。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたものの全部流しちゃえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったな。こんなん読んでも面白くないっつゝの。次回は頼むよ？次回はどうかやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

8 なんか、旅に出ます（準備編）（前書き）

小説長文化計画実行中

中国語みたいです：

8 なんか、旅に出ます（準備編）

結局セレンが泣きやむ頃には夜になってしまい、夕飯を俺が（こ重要）作り、普通に寝た。自分で作ったとはいえ、調理したものがあんなに美味しいとは思わなかった。あの時はつい悲しくもないのに涙が出てしまったね。

で、今は俺が作った（ここにアンダーライン）朝食も終えてひと息ついているところだ。

「ところでジュンはいつ出発するの？」

「……はい？何のこと？」

「何惚けた顔してんのよ。ここで1泊したらまた旅に出るんじゃないの？」

そうだったっけ？ってか俺って旅してたんだっけ？いや、違うはずだ。そもそも俺はこっち（異世界）に飛ばされてこの街に流れ着いただけのはず。待てよ？人生という面においては俺は旅人だな。

そう考えると俺はた：

「違ったの？酷く難しい顔してるけど。べ、別にジュンなんか居ても居なくても変わんないから居てくれてもいいのよ？」

顔を真っ赤にしながら提案してくる。おおっ！俺が考えてる間にセレンはツンデレレベルを上げていたらしい。だいたいツンデレだったぞ！

「マジっすか！？でもここにずっといるわけにはいかないからそろそろ行こうと思う」

そう言うときセレンはショボンとした顔になった。

分かりやすい表情だな！

「で、提案なんだけど、セレン、お前も一緒に来ない？俺はこの世界についてよく知らないし、何よりお前と離れるのも寂しいしさ」
ホントのところはコイツをこのまま放っておけないからなんだけどな。

・・・あとボケとツツコミを1人2役やるのが大変という理由もあったりする。

「な、なに言ってるのよ！ま、まあ、そんなに言うんなら一緒に行つてあげないこともないけどっ」

とは言うものの、セレンの表情は喜色満面といった感じだった。

「じゃ、早速出発！と、いききたいところだけどお互いに準備もあるだろうから、出発は今日の正午。ギルド前で」

「分かったわ。じゃあ、またあとで」

今街の時計は10時15分を指している。

「さて、何を準備しようか」

まずは食料と思い、スーパーみたいな所に入る。こっちにもスーパーってあったんだね：

中は野菜や干し肉ばかり、ということではなく、冷凍食品とかインスタント食品、缶詰め、お惣菜までもが売られていた。

確かに旅には便利だけどさ、何かちがくね！？せっかくの異世界なのに普通すぎでしょ。おい作者、俺のこの気持ちどうしてくれる。

スーパーで水や、保存が効きそうな缶詰め・インスタント食品を買って、俺は図書館へと向かった。

上の段落だけ見たら俺が異世界にいらなんて誰も思わないだろうな。図書館へ向かった理由？それは異世界に来たら魔法を習得しないと。KY女神は前にこの世界には魔法があるって言ってたからな。

（（あるよ））

（（おおう、久しぶりに出たなKY女神。セレンに活躍の場を取られそうだから慌てて出てきたな？））

（（違う違う。今日はあなたに連絡があって繋いだの））

（（連絡？何〜？））

（（今日から出張があつてさ〜、しばらくの間繋がらない所にいるから連絡は出来ないよ？））

（（遂に作者がリストラを始めたか））

（（リストラ違〜う！出張って言つたでしょ！居なくなるのは少しだけだよっ！！））

（（分かった。分かったから落ち着け。ところでさ〜、魔法って誰でも使えるの？））

（（うん。魔力の量には個人差があるけど、基本的に誰でも使えるよ〜））

（（ちなみに俺の魔力はどの位だ？そして増えることはあるのか？））

（（あなたの魔力量は…平均的な魔術師くらい。一般人よりは高いかな。あと、魔力っていうのは身長みたいなもので、あなたくらいの年齢で魔力の増加は止まるんだよ〜））

（（それだけ分かればいいや。じゃ出張頑張れよ〜））

（（あ、ちょ、最後に読者の皆様に挨拶を…））

あつ、交信切っちゃった。ま、いつか。話してる内に図書館にも着いたし、早速入りますか。

図書館の中はギルド並に広くて壁には本がギッシリ詰まっていた。

「これだけの図書館、元の世界じゃ見たことないぞ」

こりゃ探すのも大変だ。と思っていたら検索用のパソコンを見つけた。見つけてしまった。

夢壊しすぎだチクショーツ！！

まあ、便利なことには違いがないので、俺はパソコンで『魔法』と打ち込み、魔法に関するそれっぽいのを探す。

パソコンで調べた本を取ってみる。

『魔法のように相手を惹きつける10の方法』
はっ！つい自分の興味のある本を手にとってしまった。まさに魔法だ。

『初級者の魔法』

今度は真面目に取って来ました。

『第1章 まずは魔法について正しい知識をもとう。・・・』面倒くさいので読み飛ばす。

『第2章 じゃ次、魔力がなんなのかやってみようよ。・・・』さっき聞いたから読み飛ばす。ってかだんだん馴れ馴れしくなるな。

『第3章 魔法を使う時の注意、は後で他の本読んで学んで』2行で終わったアアア！！後でこの本の著者に文句言ってる。

『最終章 簡単な魔法を使ってみよう！』これこれ、じゃ、早速学びますか。

『・サンダー 対象に雷を落とす魔法。』

使い方…適当に詠唱して雷のイメージが明確になったら「サンダー」と唱える。

・ファイヤー 対象を炎で燃やす魔法。

使い方…適当に詠唱して炎のイメージが明確になったら「ファイヤー」と唱える。

・アイス 対象を氷漬けにする魔法。

使い方…適当に…以下略

・ウィンド 細かい刃の風を起こす魔法。

使い方…適当に…以下略

・フォースグラビティ 重力をあやつり身体能力の強化、敵の

無力化に使用する上級魔法。

使い方…使用する場所の標高などから、大気圧、位置エネルギーを計算し、それに見合った重力を計算し、その計算結果以内の重力を対象の周囲1メートルの範囲で操作する。詠唱は「太古より流れたる大地の力、我の魔力を礎として今ここに具現せよ。（発動する場所の緯度経度を正確に言う）。フォースグラビティ」である。まあ、ファイト☆』

だそうだ。ってか突っ込みどころ満載過ぎだろコレエエツ！！
誰だよ著者。

『著者 誰かの何か』

作者アアアアア！！ふざけんじゃねえええええ！！だいたいお前はな、（しばらくお待ちください）なんだよ。ったく、気を付けてくれよ？

もうお別れの時間？じゃ、あの子の行動をササッと纏めますか。

あの子は中級魔法も習得して、上級魔法も思ったが、上級魔法は難し過ぎて分からなかったもので、とりあえず図書館を後にした。その後俺は武器屋に行って武器を買って、ギルド前でツンデレと合流した。ここら辺はまた次の話で…

8 なんか、旅に出ます（準備編）（後書き）

次回予告

潤「何で俺が食料を買えたかって？そりゃセレンにお金を借りたからですよ。そういえば魔法覚えたよ魔法。どんなもんなのか今から楽しみだなく。・・・忘れてた、次回は武器屋行ってギルド前でツンデレと合流して旅に出まゝす。って事で次回もよろしく」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（前書き）

0時に間に合わなかった…

9 なんか、旅に出ます（出発編）

「お待たせ」

予定の時間より15分早くギルド前に着いたが、そこには既にロ―ブをご丁寧なフードまで被って着ているセレンが立っていた。

「遅いわよ！ 私なんか1時間前からずっと居たのよ！」

もう一度言うが俺は遅れたわけじゃない。ってか早いな！1時間前って、今11時45分だから10時45分には居たのかよ。30分で準備終わったのか。

「悪い悪い。待たせたついでにもうちよっと待ってくんない？」

「何よ、まだ準備終わってなかったの？」

「ちよっと約束があつてさ」

「まったく、さっさとしてよね！」

「サンキュー」

さてさて、約束通りセレンと合流するまでの回想をしますか。

図書館を出て俺は武器屋へと入っていった。

カラコルという街は貿易都市と呼ばれるだけあって（6話にちよこつとだけ書いてある）武器の種類は豊富だ。

剣、鎌、槍、ロッド、ハンマーなどたくさんあった。

ちなみに俺は魔法で戦っていると思うのでロッド希望だ。前衛後衛のバランスを考えてもセレンは明らかに前衛だからな…というのは建て前で、ホントのところは怖いからだ。命の奪い合いなんて元の世界じゃしたことないし、相手の命を奪うことに躊躇して殺されるかもしれない。そんな前衛に少女であるセレンを出すのはどうかと思うが、こっちの世界で戦ってきたセレンの方が俺より適任だ。

いずれは俺も最前線で仲間を守れるようになりたいが：

まあ、今こんな事を話してもしょうがない。

さて、この店にあるロッドだが、

- ・天雷のロッド（雷強化） 1万ワロ
- ・業火のロッド（炎強化） 1万ワロ
- ・氷雪のロッド（氷強化） 1万ワロ
- ・風斬のロッド（風強化） 1万ワロ
- ・店先に落ちてたロッド 1ワロ

が、主なロッドだ。ちなみにワロというのはこの世界の貨幣で、スーパ―で100円で買えそうな缶詰めが10ワロだったから1ワロ10円と思ってくれて良さそうだ・・・もう突っ込んでいいよな？最後のって商品なの！？売る気ゼロだろ！

「すいませ〜ん」

俺が店員を呼ぶと、店の奥から若い男性が出てきた。

「どうしたっすか？」

口調軽いなこの人。

「この『店先に落ちてたロッド』って何ですか？」

「ああ、それっすか？それは先週1日の仕事を終えて店をしまおうと店先に行ったら『持ち主を見つけてやってください』っていう張り紙と一緒に落ちてたんっすよ。で、一応誰かが持ち主になってくれるように売ってるんすよ」

変わった人も居たもんだな〜

「へ〜、じゃあそれ俺が買ってもいいですか？」

1ワロだな。損はしないだろ。

「へい、まいどあり〜。代金は1ワロっす」

1ワロス！？と、つい反応してしまった俺だがすぐにこの人の口癖と理解する。

「はい、1ワロス」

しまった〜！！そんな事考えてたらつい言っちゃった〜！！

「？ ありがとうございます〜」

良かった。店員は無視してくれた。
さて、時間もちょうどいいし、ギルドに行きますか。

って感じでした。

「サンキュー、終わったぜ」

「終わったぜって、あんた何もしてなかったじゃない」
変なの、と半眼で見られてしまった。

「さて、準備が整ったわけだが、どこに行こうか」

「え！？ そんな事も決めてなかったの？ ホント馬鹿ね！」

「ごめんなさい。じゃ、どっか静かな村みたいなのってある？」
この街は人が多くて住むには落ち着かない。

「この辺りだったらキルフア村かな？ カラコルから南東へ3時間
くらい歩いた所にあるわ」

「じゃそこにしますか。それではそれでは、出発！」

「ちよつと待った」

歩き出した俺の首ねっこを掴まれて立ち止まる。

「どしたの？」

「どしたの？ じゃないわよ！ まったく…街を出たらいつ魔物に遭遇するか分からないのよ！？ 戦う時のこと考えないと」

ああ、そうか。今までは俺1人で戦ってたから全然気にしてなかったな。反省。

「俺はロッド持つてることから分かるように魔術師。後衛で応援、
もとい支援がメインだな」

いざとなったら前衛でも頑張るけど。

「ちようど良かったわね。私は剣士で前衛タイプよ」

「じゃ、戦闘がはじまったら……」

と、打ち合わせをした。じゃ、今度こそ、
「行きますか」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「いよいよ出発か。オラ、ワクワクすつぞ。ええつと、次回は俺とセレンによる初めての共同作業。だそうです。どうせ戦闘だろ？期待させて落っこつことは作者の常套手段だからな…みんなも気をつけろよ？」

10 なんか、相方が凄いです（前書き）

朝から何書いてんのというツツコミについてはスルーの方向で…
学生は学校があるから早起きなんです

10 なんか、相方が凄いです

どうも、この頃名字である羽山を使わなすぎて、「あれ？俺って何 潤だったっけ？」ってなり始めてる羽山 潤です。

さてさて、前はセレンと街を出て終わりました：では今、俺たちはどんな状況にいるでしょう？

答えは簡単。ちっこいドラゴンだかでっかいトカゲだか10匹くらいと戦闘中（初めての共同作業中）です。おっかし～なく。前回の後書きで作者の意図を見破って戦闘フラグを回避したと思ったのに：

「ジュン！何突っ立ってんの！？戦うわよ」

だそうです。もう剣抜いてあるよ：やる気Maxだなセレン。

「へ～い。じゃ、後衛で大人しく応援してるよ」

「分かった。って、ちゃんと支援しなさいよ！」

思わず後ろを振り返り俺を睨みつけるセレン。のりツツコミも出来るのか～優秀だな。

ってかトカゲ来てるぞ？前見ないと危ないんじゃない？：しかしあのツンデレ剣士（略してつんけんなんてどうだろう？どうでもいい？さいますか）は背後に迫ったトカゲを

「邪魔っ」

と言って振り返りもせずには斬り伏せた。

ってか普通に強くな？俺いらなくな？

「俺は今『いのちだいじに』って命令が下ってるから攻撃の行動がとれなくて」

と、某ゲームの作戦名を出して動こうとしない俺。

「何意味わかんないこと言ってるの？早く戦いなさいよっ！」

トカゲを斬っては捨て、斬っては捨てを繰り返して残りを3匹にしたセレンが言う。もう戦闘にすらなっていない。

「分かったよ」

って言った瞬間、空気を読んでかトカゲが1匹俺に向かってきた。そういうことで俺も戦闘に強制参加。

じゃ、折角だし魔法使ってみるか。まずは詠唱してイメージを高めるんだっけ？

「えー、雷、電気、電池…」

と詠唱だか連想ゲームだかを始める俺。5くらい言ってもういいかと思いい、

「サンダー！」

って唱える。すると次の瞬間、天から敵に雷が…なんて都合のいい展開は待っておらず、俺とトカゲの間にビリッと静電気くらいの電気が流れた。

・・・よ、弱えー。想像力が足りないっぽいな。

でも今の静電気でトカゲは苛立ったようで、真っ直ぐ俺に突っ込んできた。それを俺は大上段に構えたロッドをトカゲの首目掛けて振り下ろし、首の骨を折って絶命させた。うん。結果オーライ。

さて、俺が1匹倒す間にセレンは残りの2匹を倒していて、初めての共同作業は無事終了した。

「ジュン、後衛なのに魔法が出来ないって…もしかして弱い？」

まあ、魔法使ったのも初めてだし元々前衛タイプだからな。とは言わずに、

「はい、こっちの世界に来て日が浅いもんで」

と言っておく。嘘ではないからな。とにかく非常時以外は後衛でのんびりしてたいし。

「ジュンの世界は平和だったのね。まあいいわ。しょうがないからジュンも私が守ってあげる」

ニヤニヤしながらそう言ってきた。セレンにしては珍しい表情だなとおもいつつ、断る理由もないってかむしろ大歓迎なので、

「よろしく願います」

とだけ言っておいた。

ちなみに今俺たちはカラコルから南東に2時間ほど進んだ所にい

る。つまりあと1時間ほど進むと村に着くのだ。今までに魔物はさっきの集団以外見かけていないので、この辺りに魔物は少ないのかセレンに聞いたところ、「そうね。街道が整備されてるから遭遇することはめったにないわ」らしい。

本題はここからだ。残りの道のりは街道の整備されていない森を行かなくてはならないらしい。当然魔物もううじゃうじゃ：今から気が重いぜ。

「じゃ、行きましょ」

という言葉が「じゃ、逝きましょ」に脳内変換されたのはしょうがない事だろう。うん。

「魔物に会わないように祈ってくださいか」

そう言い、俺たちは森の中へと入っていった。

10 なんか、相方が凄いです（後書き）

次回予告

潤「うわゝ次回は・・・森とか憂鬱だゝ。どう考えても戦闘があるでしょ。森林浴で終わるわけないもんね。何の嫌がらせだ作者。あと電車の中だからってコソコソとスマホ使って打つの止めろよ。次からは堂々と打つように！」

11 なんか、地面から出てきました（前書き）

魔法使っちゃんいます。

11 なんか、地面から出てきました

やってきました。森の中。まだ日が出ているはずなのに中は薄暗い。虫もいっぱいいる。しかもジメジメしてる。うん、最悪だね。

「ま〜だ〜?」

セレンに聞く。

「まだよっ! うっさいわね!」

大分厳しい言い方: もっと優しくしてくれてもいいじゃん。ツンツンめっ。

「すぐに怒るなんてカルシウムが足りないんじゃないかい?」

牛乳嫌いな俺が言えたことじゃないけど。

「森に入ってから5分おき位に言われてれば誰だって苛立つわよ! ジュンの方が我慢が出来ないなんてカルシウムが足りないんじゃない?」

言い返されてしまった: 読者の皆さんだって俺の方が正しいと思うでしょ? え、お前が悪いから謝れって? 俺が間違ってたの? そうだったのか。

「セレン。脳内会議の結果、俺が悪いと分かったよ。悪かった」

そう言うときセレンは顔を赤く染めて、

「わ、分かればいいのよ。変なジュンね! 私も言い過ぎた、ごめん」

と返した。最後の方はよく聞こえなかったが、俺の情報（もちろんラノベですが?）によると聞き直さない方がいいとなっているので無難に、

「お、おう。今度からは気を付ける」と言っておいた。

こんなやりとりをしていたら森を抜けていた。うん、太陽って素晴らしい。あれ? そういえば1回も戦闘がなかったな。俺の予想の常に正反対を貫きやがって、作者の天の邪鬼め。

あとは平原を5分ほど歩けば、歩けば…

「何て村だっけ？」

誰にでもど忘れはあるよね。あくまでも忘れです。忘れているわけではありません。大切な事なので2回言いました。

「キルファ村よ。300人位の人が住んでる小さな村。周囲を大きな川と森で囲まれているから基本的に自給自足で成り立っているわ」
だそうです。

「ありがとう。助かったよ」

するとセレンは顔をさつき以上に

真っ赤に染めて、

「ふ、ふん、常識よっ！ジュンも早く覚えてよね！」

と言って早足で前に進んでしまった。可愛いヤツめ。

俺は「善処する」と言って歩みを進めようとした。そう、進めよう（・・）とな。

（地面の下に何か居る！？）

咄嗟に気付いた俺はセレンにも声を掛けた。

「セレン！下から何か出てくるぞ！！」

俺の言葉にセレンは、え？と反応をし、ヤツに気付いたのか走り出すが、ダメだヤツの方が速い。

（ヤバイ、このままだと間に合わねえ）

何故か知らんが地面の下ヤツの狙いはセレンだ。しょうがねえ。

「安定する体勢になって剣の腹をこっちに向ける！」

セレンは有り難いことにすぐに行動に移してくれた。間に合うか…

「凍りやがれ！グランドアイスッ！吹き荒れろ！テクノウィンド！」
「！」

中級氷魔法を詠唱してセレンの足下やその周囲50メートルの地面を凍り漬けにする。その後詠唱したテクノウィンドという中級風魔法を、セレンの剣の腹に1点集中させることで瞬間的に遠くまで滑らせる。

セレンが滑っていった直後、さっきまでセレンがいた場所の地面から氷を突き破って直径2メートル位のやたらでかい緑のワームがでてきた。

（なんとか間に合ったな。正直魔法に頼るのは賭けだったけど）

ちなみにさっき使った魔法。グランドアイスはアイスの1こ上の魔法で、地面を凍らせる範囲魔法。テクノウィンドはウィンドの1こ上の魔法で、対象に鎌鼬をぶつける技だ。今頃セレンの剣はボロボロだろう。後で謝らないと。ちよつと飛ばす方向間違えちゃって、セレンが木にぶつかって気絶したのは俺と読者の皆さんとの秘密だ。くれぐれも作者にばれないようにな？

「デカブツめ。よくもセレンを吹っ飛ばしたな！覚悟しろよ？」

皆さん、頼むからそんな目で俺を見ないで。・・・新しい境地に目覚めちゃう。

グオオオオア！！

ワームが待ちかねて吠え出しちゃったよ。じゃ、冗談はここら辺にして、

「俺がセレンを気絶させたのをお前は見てたからな。悪いが口を滑らせないように殺させてもらうぜ」

え？悪役になってるって？バカ言っちゃいけませんよ。俺は善良な一般ピーポウ（ネイティヴっぽく）ですよ。

って、また冗談始まっちゃったよ。俺の意志は生卵よりも柔らかいな：ま、いっか、俺らしいし。

グオオオとワームがこっちに向かって突進してくる。ハッキリ言っ
てめちやくちヤキモいっすワームの兄さん：

さて、あれだけでかいと物理攻撃は効きそうにないな。魔力もまだ余裕があるから魔法で戦うか！

あ、そうそう、気づいてる人も多いと思うけど、今回はここまで。後書きに俺が習得した魔法を載せとくから、それでも読んで予習しつつ次の投稿をお楽しみに！

どうした作者？え？魔法の説明に文字数使いそうだからここで次回予告しとけて？ハイハイ、了解。

潤「次回予告なんて誰得なコーナーだよ、と最近思い始めている潤君でゝす☆次回は皆さんの想像通り、ワームとの戦いです。一刻も早く倒して俺の心の安寧を取り戻せ！」

11 なんか、地面から出てきました（後書き）

（魔法一覧）

《下級魔法》

・サンダー 対象に雷を落とす魔法、のはず。本編じゃ残念な結果に：

・ファイヤー 対象を燃やす魔法。外で料理するときに便利。

・アイス 対象を凍り漬けにする魔法。風邪を引いたときにも使えるぞ☆

・ウィンド 対象を細かい風で切り刻む魔法。キャベツの千切りにもってこい。

《中級魔法》

・サンダージャッジメント 10～20個の雷球を対象の周りに浮かべ、任意のタイミングで一斉に雷球から雷が対象目掛けて飛んでくる。

・サンダーボイル スーザン・ボイルとは関係ない。サンダージャッジメントの派生系。10～20個の雷球を1つ圧縮し、対象にぶつける魔法。

・ファイヤーウォール 別に何かのシステムの名前じゃない。炎の壁を作り出し、任意のタイミングで倒して対象を焼き尽くす。防御としても使える。

・ダークネスファイヤー ファイヤーウォールの派生系。炎自身をも焦がす温度の黒い炎を対象の地面から柱状に発生させる魔法。

・グラントアイス 対象の足下を中心に半径50メートルの地面を凍り漬けにする。

・ピアシングアイス グラントアイスの派生系。対象の足下を中心に半径30メートルの地面からドデカイ氷柱を出現させる魔法。

・テクノウィンド 対象を鎌鼬で四方八方から切り刻む魔法。潤

君は頑張って1点集中させました。

・ウィンドバースト テクノウィンドの派生系。自分を中心に半径10メートルに鎌鼬を起こす。これも防御にも使える。

・デイズタスクエイク 対象の地面をひっくり返す魔法。農業に使えるかも。

12 なんか、シリアスです（前書き）

何か最終回みたいになりました。

12 なんか、シリアスです

さて、前回は微妙なところで終わったから、ワームが突進している途中という気持ち悪い画からスタートする。

ってか早いとこどうにかしないと喰われそうだ：

「燃やし尽くせ！ファイヤーウォール」

俺の目の前に高さ10メートル横5メートルくらいの炎の壁が出来上がる。熱く感じないな。術者に対する安心設計か？

俺が付いたんだけどさ、下手に長い詠唱するよりもささと詠唱した方が上手くいくんだよね。たぶん俺の場合、ラノベとかゲームとかでこういうイメージは身近に有ったから、変に意識するとかえってイメージが霞んじやうだろうね。

さて、そろそろ間合いに入ったな。

そう思い、俺は心の中で倒れろ～って念じた。

すると、炎の壁は俺の思い通り倒れ始めた。

・・・こっち側に：って、ええええッ！？こっち側！？何でこんな時にギャグ発動してんだよ！ちよ、まっ、や、やべえ！

と、俺はどうすることも出来ず、あたふたと慌てる。

どうするどうする、と考える考えて、俺はもう1つの防御にも使える魔法『ウィンドバースト』を唱えることにした。

「我を守りし聖なる風よ！マジで頼みます！ウィンドバースト」

ゴウツという音と共に俺の周りで風がうねった次の瞬間、凶悪なまでの風が周囲の草花とファイヤーウォールの炎を刈り取った。ワームも例外ではなく、動けはするものの、身体から体液が漏れ出してグロさ当社比2倍である。

・・・この魔法強過ぎだろ

そんなことを考えていたら、ワームがこっちに口を向けて何かそこそと行動していた。無傷で。

って、無傷ウウウ！？こっちの生物はミドリムシといいワームといい何でこんなに生命力が有り余ってんだよ！1発で倒せってか？いいぜ、やってやろうじゃないか。

と言っても使える魔法はあと2回が魔力の限界だな。

どうするか…と考えていると、こそこそしてたワームの口から変な液体が俺に向かって飛んできた。

テンプレだな。この手の攻撃は酸か毒で、触れるのはもちろん発生した気体を吸ってもアウトってパターンだろ？

「見え見えだぜ！」

と、軽く飛んできた液体を避ける。・・・移動した先に地面から出したワームの尻尾があると気付かずに。

俺はヤツのめちゃくちゃ重い一撃を食らってしまった。チクシヨウ、こそこそしてたあの時か…

その後もヤツは俺で遊ぶかのように尻尾で俺を木に叩きつけたり、空中に放り投げて尻尾で叩き落したりしていた。

「やっべ、身体が動かねえ…」

恐らくあばらが何本かいつてしまっただろう。内臓もうボロボロだ。思えばこっちの世界に来て初めて怪我したな…

はあ、もうすぐ俺は死ぬのか。思ったよりあっけなかったな…いや、まだあと1つやり残したことがあった。

「俺にはな…まだ死ぬわけにはいかねえ理由^{わけ}があんだよ！！」

恐らくこの言葉はワームに対してじゃなくて自分自身に言いたいことだろう。

俺が死んだら誰がセレンをワームから、いやこの世界から守るってんだよ！

そう考え俺は自分の身体に鞭打って無理やり立ち上がる。

「デカブツ、今から俺の最大の一撃を叩き込んでやる。・・・かか

つてきな」

その言葉を理解したのかは分からないがワームは俺に向かって突進してきた。ヤツも決着を付ける気だろう。

俺は口の中に溜まっていた血を吐き出して、全身に魔力を巡らせ身体強化を図る。

そして残った魔力を右手に集めて刀のような形状をとる。魔力って黒かったんだな。見たこと無かったから知らなかった。

さあ、決戦の時間だ。

ワームが俺の目の前にまで迫ってきて、俺の身体の呑み込まんとして、何重にも重なった歯を持つ口を大きく開く。

俺はワームの頭と思われる辺りまでジャンプした。身体強化した俺のジャンプはワームから見れば瞬間移動にも見えただろう。

ワームは一瞬混乱したが、すぐに俺の場所に気付いた。しかし、俺にはその僅かな隙だけで充分だった。

「食らいやがれえええッ!!!!!!」

グチャツという擬音語がびったりだろう。そんな音を立てて俺の魔力でできた黒い刀はワームの脳天から突き刺さった。

もう動かないし殺せたんだろう。

・・・ダメだ。意識が、遠の、く。

ごめん、な、セレン。お前の、事、世界から、守ってや、、
れそ、、うに、、、、な、、、、、、、、

12 なんか、シリアスです（後書き）

次回予告

転生の女神「どうもどうも、久しぶりね。最近出れてなかったけど主人公が生死不明って事で今日は私が次回予告をします。つかヤバかったね。潤君大丈夫かなあ？最終回にならなきゃいいけど…とりあえず今回は潤君が生きてた場合は潤君視点で何かするんじゃない？とにかく、次回を見てみないと分かんないわ」

13 なんか、生きてました（前書き）

潤は爆発すれば世の中平和になると思う

13 なんか、生きてました

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見当たらないから真っ白い空間か？

・・・あれ？この文章。それにこの空間。何か俺は知ってる気がするぞ？

「あっ、起きた〜？」

そこには、セレンではない見知った顔がいた。

「お前はKY女神！そうか、ここは転生する直前の空間だ〜」
でも何でここに居るんだ？

「転生の女神だけだね…あなたはワームと戦って死にかけてたから私が空間転移で運んで復活させたの」

ワーム、ワーム・・・はっ！

「セレンは？セレンは大丈夫だったのか？」

「復活して早々に彼女の心配とは、ニクいねコノコノ〜」

「そ、そんなんじゃないよ！で、どうなんだよ？」

こんな時に顔を赤くするのはセレンのはずなのに何故か今俺は顔が熱い。きつと顔が赤くなってるんだろう。

「彼女なら無事だよ。誰かさんがいなくて泣いてたけどね〜」

KY女神がニヤニヤしながら言ってくる。

そうか、俺がいなくなっただけに泣いてくれたのか…申し訳ない気持ちもあるけど何か嬉しいな。

「で、そろそろ戻りたいんだけど」

「どっちの世界に？」

はい？どゆこと？

「今なら元の世界と異世界、どっちな好きな方に戻してあげ…」

「異世界だな。考えるまでもない」

俺がそう言うとKY女神は意地の悪い笑みを浮かべて、

「異世界には未練をたっぷり残してきたんだね」

とか言いやがった。まあ、ホントのことなんだけど。

「う、うるさいなく、早く転移してくれよ」

「ハイハイ、あ、あとこれはアドバイスね。もっと強く、仲間を守るくらい強くなったら古の神々の神殿って所に行くといいよ。あなたの為になる何かが置いてあるから」

「おう、サンキューな。お前は今まで会った女神の中で1番の女神だ」

「ホント？ありがとう。困ったら何時でも呼んでね」

女神なんてお前以外見たこともないが、嘘は吐いてない。嘘は。

「って、お前呼んでもほとんど居ないだろうっ!？」

転移が始まったのか俺の身体が薄くなってきた。

「嘘は吐いてない。嘘は」

コイツ：俺の考えまで読んでやがった。プライバシーの侵害で訴えてやろうかな。

そんなことを考えていたらいつの間にか異世界に着いていた。

「ここは：ワームと戦った場所か」

そこにワームの死体はもう無く、俺がウィンドバーストを使った痕だけがぼっかりと残っていた。

（（着いた？））

この声はKY女神か。

（（おう、着いたぞ。セレンはキルファ村に居るのか？））

今は一刻も早くセレンに会って安心させたい。

（（うん。村に居るよ））

（（分かった。じゃ切るぞ。・・・覗き見るじゃねーぞ））

くぎを差しとかないとやりかねないからな。

（（ソ、ソシナノアタリマエジャナイ））

分かり易っ!!女神酷く分かり易っ!!

キルファ村に入った方がいいが、セレンがどこにいるのか分からん…片っ端から行きますか。

村自体は広くないので1人目に尋ねてセレンがどこに居るかすぐに分かった。どうやら宿屋に居るらしい。

宿屋2階のセレンの部屋の前まで来た。第一声はどうしようか、セレンは怒ってないだろうか。そんな余計なことばかり頭に浮かぶ。(しっかりしろ！羽山 潤！何を怖がってるんだ)

自分を叱咤激励して部屋へと入る。中にはイスに座ってどこか暗い表情で床を見つめていた。

「セ、セレンさくん？セレン？セレン？」

なかなか気付かずないな…

「セレンってば」

少し強めに言ってみる。

「？、！！」

あ、気付いた。セレンはまるで幽霊でも見たかのように口をパクパクさせている。いや、金魚にも似ているな…いやいや、よく考えてみれば口をパクパクさせるのはなにも金魚に限ったことじゃない。魚であればあの行動はみんなやっている。だとすれば魚のようにと言うべきか？いや、それは抽象的過ぎだろう…

おっと、セレンの心理戦で危うく思考の深みにはまるところだった。セレン、恐ろしい娘っ！

「ジ、ジュン？」

あ、あれ？もしかして忘れられてる？いやいや、まだ数日しか経っていないはずだぞ？

「俺のこと、ご存知ですよ…ほら、数日前まで一緒に…」

「ジュン…！！」

そう言っつて（叫んで？）セレンは俺に抱きついてきた。俺はビツクリしておもわず、

「は、はい。確かに潤は俺ですよ」

という変なことをいってしまった…本当は「潤は俺の名前ですよ」
って言うはずだったのに。

「今まで何処行ってたのよ！バカッ！」

グハアッ、涙目＋上目遣いは反則！審判、早く反則とってよ。このままじゃ俺の心臓に良くない！

「と、とりあえず一旦離れて、お、落ち着こうじゃ、じゃないか」

まず俺が落ち着けー！と思わず自分に突っ込んでしまったのは秘密だ。

「っー！ご、ごめんなさい。つい」

いいって、と言って一回落ち着く。すーはー、すーはー。よし。

「今まで何処行ってたかだけど、友達に拉致られて、しばらく療養してた。おかげですっかり元気になっちゃって」

ハハハ、と笑って誤魔化す。それに対してセレンは「ふーん。無事ならいいわ」と言っていた。

その後、俺たちは気絶した後どうなったかそれぞれ話し、その日は宿で寝た。か、勘違いしないでよね！ちゃんとお金は払ったんだからね！

うーん、俺にツンデレの才能は無さそうだな…

13 なんか、生きてました（後書き）

次回予告

潤「次回予告に復帰したぜ〜！あと誰だ前書きにあんな事書いたの！？どうせ作者だろうけどな…さてさて、次回からは、またいつもの通りの日常にもどります。俺はこれからキルファ村でなにをしてくのかな〜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月3日22時53分発行